咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑨　横須賀製鉄所の建設II

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

非難の嵐

幕府による横須賀製鉄所（近代総合工業施設）建設という輝かしい大事業も、けっして順風満帆ではなかった。幕府内にも反対意見は多く、無用不急のものと非難した。薩摩藩などは「金の無駄遣いだ」と罵り、英国公使パークスはフランスに出し抜かれたことから「成功する筈はない」と抗議した。しかし横須賀と横浜製鉄所併せて240万ドル（現在の240億円以上）の建設費用は幕府の当初の見積もりの半額であり、フランスへの支払いも年60万ドルにとどまった。加えて小栗は幕府の予算のほかに船台や工場を完成順に稼動させ、その収入を当てるといった、建設中から採算が取れる計画を立てていた。

建設費は小栗の遣り繰りで賄ったが、フランスに国を売ったと騒ぐものもいた。これは事実無根で、老中・水野和泉守忠精らがロッシュに交わした約定書には借款も担保も存在せず、フランスからの借金で建設が行われたわけではなかった。幕府から明治政府に引き継がれたときに、フランスに対する未払い金が14万円余り（現在の14億円）残っていたが、フランスとは多岐にわたる契約があったので、仮にこのなかに製鉄所建設費の滞り金が含まれていたとしても、せいぜい数万円（数億円）程度といわれている。年60万ドル（60億円）の支払額からすると、小額の半端な金額が滞るということも考えにくく、製鉄所関連は約定書どおりに毎年完済していた可能性が高い。

慶応元年（1865）オランダで製造された3トン蒸気（スチーム）ハンマー。慶応二年に横須賀製鉄所に据え付けられ、以来130年にわたって活躍した。現在はヴェルニー公園の記念館に展示されている。写真は見学に訪れた小学生達にスチームハンマーによる鍛造作業を実演して見せる艦船修理廠の工場員。（1982年7月4日）

横須賀の恩人・栗本瀬兵衛（鋤雲）は小栗上野介忠順と共に、"製鉄所御用掛り"として近代工業施設「横須賀製鉄所」の建設に尽力した。
（横須賀市自然人文博物館前の公園にある栗本鋤雲の胸像）

しかしフランスに不審を抱く勝安房守（海舟）は日仏の新たな関係を憤慨し、海舟日記には「大邪（＊小栗を指す）既に金を払郎西（フランス）に借りるの策あり」、「唐津（＊老中・小笠原壱岐守長行）の信ずるは、狎邪の小人塚原（昌義）、木下（謹吾）、小野（友五郎）、肥田（浜五郎）の輩数人」「我が官吏、仏郎察（フランス）の強化師カションと云う妖僧に心酔し・・・」などと製鉄所建設の労をとった有司とフランスとの関係を非難している。面白いことに、ここに罵倒された面々は皆、日本海軍の礎を作り、また日本近代化に尽くした人々であった。

フランスを危険視するのも事実に反し、フランスの目的は絹貿易を拡大して利益を得ることであり、これは小栗ら幕府も承知していた。フランスには日本に領土的野心を持つほどの東アジアに展開する軍事力はなく、日本に滞在する海軍のほかには、サイゴンから派遣できる兵力は200名にすぎなかった。

勝は「日誌」や後年の談話集「氷川清話」にも小栗のフランスに対する借款話を語っているが、この件も実際には小栗とは無関係である。慶応三年二月に大阪で将軍慶喜に謁見したロッシュは、大阪に滞在して何度か老中・板倉伊賀守勝静と外国奉行・平山図書頭敬忠の二人と借款について会談している。インフレによる物価高騰や長州藩による外国連合との下関戦争に対する賠償金300万ドルの支払いなど、諸々の出費を抱えて財政難に陥っている幕府に対し、ロッシュは5百万ドルの借款を提案し、担保に蝦夷地や樺太の鉱山採掘権譲渡などを持ちかけた。結局この借款は実現しなかったが、幕府の借款計画はフランスだけではなく、英仏両国に対するものであった。明治以降の「小栗が日本の国土を担保にしてフランスに国を売った」という話は、思い込みや事実誤認、加えて法螺話をちりばめる傾向にある勝海舟に淵源があり、学者が資料批判無しに吹聴したことによって一部の通説になったと思われるが、近年の研究ですべて否定されたといってよいだろう。

横須賀の恩人・栗本鋤雲

フランスとの交渉を仲介し、小栗とともに製鉄所建設に尽力した栗本瀬兵衛（鋤雲）は、数百戸の貧しい漁村であった横須賀村を大発展させた恩人でもある。栗本は小栗の盟友と言える人物で、小栗より五歳年上の彼は子供の頃に小栗の屋敷内にあった安積艮斎（ごんさい）の私塾に通った縁があった。艮斎は幕府官立学校・昌平黌の教授も勤め、江戸学問所の儒官として国内筆頭に数えられ、門下生には小栗や栗本のほか、川路聖謨、岩崎弥太郎、吉田松陰、高杉晋作、榎本武揚ら錚々たる顔ぶれがいる。

瀬兵衛はのちに栗本家に養子に入って医学の道に進み奥詰医師となるが、安政二年（1855）三十四歳の時にオランダから寄贈された日本初の蒸気船スンビン（翌年"観光丸"と命名され幕府海軍練習艦となる）の試乗に応募したことを咎められ、侍医を追われて箱館に左遷となった。

栗本は蝦夷地で病院兼医学所を設立し、また畜産振興に尽力、川の整備をして輸送経路を作るなど数々の事業をおこなって成功させた。やがて箱館奉行支配組頭となり、文久二年（1862）七月、千島列島探検に出発してアリュート族居住地まで足を延ばし、久春古丹（樺太）に廻って越冬。流氷の融ける春を待って択捉、国後を調査した。多くの功績を挙げたことから江戸に呼び戻され、公使ロッシュの通訳となっていた宣教師カションと再会する。カションとは箱館でお互いに日本語とフランス語を教えあった仲であり、フランスとの関係は栗本とカションのパイプが大きく役立った。"製鉄所御用掛り"となった栗本は、小栗から「製鉄所やドックを造る」と言われたとき、海外視察の経験がなかった彼は、ドックとはどのようなものか皆目分からなかったという。　のちに栗本は外国奉行となって安芸守を任官し、慶応三年にはパリ万博に幕府使節団として渡仏した。使節代表の徳川昭武がナポレオンⅢ世に謁見した際の通訳を務め、その後たびたびナポレオンⅢ世から呼ばれるほどの信頼を得た。なお栗本は滞在中、日本人として初めてアルプス登山を試みている。

小栗の幕臣としての矜持

或る時、栗本瀬兵衛は製鉄所建設に掛かる費用の膨大なことを心配して小栗上野介に質すと、小栗は笑って「いまの幕府の財政はまったくの遣り繰り経済で、この計画をやめたからといって他の有用な事業に廻せるわけでもなく、故に是非必要な製鉄所やドックを造るのだといえば、他の冗費を削る口実になる。」そして「愈々出来（いよいよしゅったい）の上は、旗号に熨斗（のし）を染出すも、なお土蔵付き売家の栄誉を残すべし。」（完成すれば、立派な価値あるものを熨斗をつけて次代に贈ることになり、幕府の名誉にもなる）と答えた。

近代国家アメリカを見聞した小栗は、早晩幕藩による封建体制は続かないと予感していたとしか思えないが、幕府が続く限り一日も休まずに尽力するのが自分の役目と心得、将来の日本のために奔走した。のちに栗本は当時を振り返り、「上野（こうずけ）がこの語は、一時の諧謔（冗談）にあらず。実に憐れむべきものあり。」と回想している。

しかしその小栗上野介も、まさか薩長に政権を譲り渡すことになろうとは、この時点では夢にも思わなかったに違いない。

（続く）

1865年製造のオランダ製0.5トン蒸気（スチーム）ハンマーを使用した鍛造作業風景。3トンハンマーとともにヴェルニー記念館に展示されている。（1983年　艦船修理廠・鍛造鋳造工場にて）